

閑話休題5

しづかりふかい

畝邨村にある貞観正國寺の住職の倅、同源叭羅蜜斗がインパラのハンドルを握って龍吞村に入り、龍吞神社へと続く石敷きの参道に沿って甍を連れ、間口をならべる町屋造りのような村のメイン・ストリートの内の一軒 天易家を訪ねて高校時代の同級生、真今に尋ねた。

「この宇宙の大きさは465億光年、年齢は137億年って言うが、その前の状況って言うか、宇宙ってものの本当の始まりってのは、いったい、どうだったんだろうなってな」

「君がそれを言うとは」

宇宙好きの女性でもナンパするのかい？」

真今は長髯を撫でつつ長髪に半ば隠れる片眼鏡から、まじまじと叭羅蜜斗を見て、そう言った。金髪のスパイキー・ヘアにムスリントップとよばれるTシャツ、黒い皮革製パンツ、鉄の鎖のネックレス、安全ピンのピアスという叭羅蜜斗はサングラスの下で眉を上げて、口をへの字にしてから、

「Oops!」 けつ、まあ、いいさ。

ともかくさ、いつが始まりなんだろうってな。ビッグバンだって昔は思っていたが、並行宇宙があったり、他の多次元の世界もあったりするじゃないか。全宇宙・世界の始まりが世界の始まりと言うべきじゃないか、って考えたらもうわからない」

「そんなことが気になるキャラじゃないだろう」

「すべては一樣じゃないのさ。揺らぎっていうか、量子論的な」

「最近、勉強してるんだな」

「俺も一応、真神高卒だぞ。偏差値72以上だ」

「学校の勉強など大したことはない。真の学問は車の運転に似ている。教習所を卒業してからが本当の練習だ」

「わかった、わかった、教えてくれよ」

「古来真神王家に専属する上皇術の家柄だが、現代の宇宙科学には無知だぞ」

「どうか。お前ならわかると思ったがな」

「すべてが見えるがまじであるという前提の下で、現今言われる超ひも理論やM理論などの一般的な理論なら少しは話せるが。」

その理窟から言えば、この4次元時空（1次元の時間＋3次元の空間）の宇宙は11次元の時空にあるブレーンから始まっているという。小生らは現在でも11次元時空の際にある10次元時空の中で膨張した4次元時空にいる」

「1ミリもわからないが。何で十や十二じゃなくて、十一なんだ？」

「大丈夫だ。小生も大してわからないし、

ちなみに、超ひも理論によれば、クォークや電子や重粒子や光子などの素粒子は、ひもが様々なパターンで振動することによって、それぞれの状態が別の種類の素粒子に観測することによって有とされている。これに基づいて現在ある数十個の素粒子を説明するには、10通りの振動の方向が必要になるらしい。それで11次元の時空というわけだ」

「なるほど」

「しかしこは小生の言わんとすることの中心ではない」

「どうか。じゃ、言わんとすることを言ってくれ」

「4次元の空間（5次元時空）だって空想できまい」

「どうだよ。座標の棒（軸）がもう一本多い状態だろうが、何處にその一本を足してよいか、俺には見当も附かない。

ましてや十一なんて……」

「小生もさよっだ。

小生らは3次元の空間で生き、経験し、それでしか思いを作れない。その範疇でしか思考は動けない。その起動しか走れない。思考は自由ではない。平行宇宙などと言っても、複数の宇宙がびったりくっついてならんでいるとか思い描けないし、離れているならその間隙はどうなんだとか、空間があるのか、ならその空間は何なんだとか。

そっではないかもしれないというのに。

宇宙の始まりが無境界条件であつたとすれば、特定の状態を設定しなくてもよい、何でもなくてもよい、という考え方もありだ。しかし思考それを夢想できるか」

「無境界条件？」

「小生らは宇宙の歴史を円錐形で考えがちだ。つまりある点（特異点）から末広がりにはたがって行く。すると設定される点がなくてはいけなくなる。

しかし宇宙の成長を球体であると考えると、球体の極点は球面のどこにもあり得るので、宇宙の初期状態を設定すべき地点がない。つまり特異点の設定は必然ではなくなる、と言える」

「……うむ」

「できないことが何となくわかればよい。数学的証明でしか捉えようがないだろうな。

さて、11次元の時空だ。空想できるか」

「うー」

「さもありなん。宇宙開闢だの、現在の宇宙の実相などと言っても、物理学の示す数学的な解は小生らの想像を絶す。

物理学から国語的な哲学に回帰してしまっが、そもそも始まりって何だ、って問いもある。その問いに厳密に答えられるか。答えられない。すべての解答は問いのトートロジー、同義反復だ」

「世界・宇宙は脳の産物だつて説があつたな」

「だろうね」

「しかし客観世界、物自体の世界はあるだろう」

「ないよ。」

わかり難いことだが、ないんだ。比喻でも解釈でもなく。実質ないんだ。

一つには、相対性理論に見られる時間や空間が一定ではないという証明だ。絶対時間と絶対空間の否定だ。もう一つは素粒子の世界では時間の可逆現象、時間が戻る・逆に進む、があるということだ。

さらに言えば、もう個々の諸考概が何から何まで際限なく脳に捏造だ。たとえば色彩だ。物に色があるんじゃない。色彩は乱反射する光の波長の差異だ。だが波長の差異が赤になったり青になったり理由・仕組み・関係性はまったくわからない。色彩は霧からの捏造だ。色彩は存在しないんだ。波長があるというかもしれない。いや、波長もない。ないと言いつける根拠は色彩の場合と同じだ。波長がなぜ波長なのか、その関連性・仕組み・理由は？ 小生らの世界は現に見えている世界とはまったく別物、別の様相を呈しているのかもしれない。別という考概が届かないほど、まったくの別ものかもしれない。又問われるであろうか、では網膜はなぜ刺激を受けるか、と。だが言おう、刺激も無だ。刺激は脳の捏造で刺激となる」と

「そっかなあ。ならば、どうして脳は捏造を始めようと起動するんだろう。その動機は何を契機に、何を切っ掛けに生じるのかな？」

「波長さ。色即是空、空即是色の妙義がこれさ」

「そっきたか」

「そっさ。そっさういふさ」

小生らにとって実存的に、原的な直観に従って記述するならば、客観も事実も物自体も存在（存在という事象・存在という状態）も色彩も刺激も波長も網膜も無も脳も捏造も動機も契機・切っ掛けも、いわゆる「脳」の捏造なのだ。だが結局それは何と解釈すべきなのだろうか。客観的実在の有無なんて、論議としては下の下の下さ。いや、下も……キリがない。ともかくも本当の無さ。小生らが考えるような概念の無を遙かに超越した、実際の死だ」

「始まりどころの話じゃなくなってきたな」

つていうか、今も何も始まっていないか、もしくは、とつくに終わっちゃったか、それとも……」

「カントは理性に制限を与えた。仏陀も捨置除却を言った。考えても意味のないことは考えるな、と。あゝ、ナンパっていう意味があつたんだっけ？ それは小生の分野ではないね。」

まあ、茶でも飲んで行きたまえ。

いつもの決まり文句ですまないが」